

実践女子大学教授 駒田 亜紀子

はじめに

このたび関西学院大学図書館に収蔵された『ラテン語ウルガータ聖書写本』は、13世紀後半に北フランスで制作された、一卷本のラテン語聖書写本である。西欧では、中世を通じ、用途に応じて、様々なタイプの聖書写本が制作された。本講演では、今日の我々にとって最も身近な形式である携帯可能な一卷本聖書の原型ともいうべき『ラテン語ウルガータ聖書写本』について、その特徴を様々な角度から考えたい¹。

1. 関西学院大学図書館所蔵『ラテン語ウルガータ聖書写本』の概要と物理的構成

関西学院大学図書館所蔵『ラテン語ウルガータ聖書写本』は、縦横約155×110mm、厚さ約70mm(厚さ約5mmの表・裏表紙の装丁板を含む)の、一卷本聖書写本である(図

1-1)。この版型は、今日広く普及している小型版の『新共同訳聖書 旧約聖書続編つき』(約150×110mm、厚さ約55mm)にはほぼ等しい。小型版『新共同訳聖書 旧約聖書続編つき』が約2420頁に旧約・新約聖書全編と「旧約聖書続編」を収録するのに対し、『ラテン語ウルガータ聖書写本』は、極薄の獣皮紙750葉=1500頁に、『新共同訳聖書 旧約聖書続編つき』を超える文量のテキスト(後述)を収録する。本写本に用いられた獣皮紙(仔牛皮による犢皮紙(とくひし)か?)は非常に薄く均質に加工されており、反対面の文字が透けて見えるほどである(図1-2)。

本文は、縦横約100×70mmの枠内に2カラム43ないし44行のテキストが筆写され、小型ながらも頁を繰るのに十分な余白が確保されている。計算上、1行の高さは2.3mm程しか無いが、熟練した写字生(本文筆写を行う職人)が省略記号を駆使して筆写した本文は、読み取りに十分な明快さを保つ(図2)。



図1-1 装丁(裏表紙)



図1-2 写本の獣皮紙(fol. 684v「黙示録」本文末尾)



図2 fol. 32r 「出エジプト記」

2. 西洋中世のラテン語ウルガータ訳聖書写本²

関西学院大学図書館所蔵『ラテン語ウルガータ聖書写本』は、ウルガータ（ウルガタ）訳と呼ばれるラテン語旧約・新約聖書テキストを収録する。ウルガータ訳聖書とは、聖ヒエロニムス（347頃-420）が382-405年頃にかけて校訂編纂したラテン語聖書である。中世には、ウルガータ訳以外

のラテン語聖書も用いられていたが、13世紀に入ると、西欧の神学研究の中心拠点であったパリ大学における校訂作業を通じて、ウルガータ訳聖書本文の標準化・規格化が進められた。今日用いられている章による聖書本文の分節は、1207-1228年にイングランドのカンタベリー大司教の位にあった神学者ステファン・ラングトンの考案とされる。ウルガータ訳聖書は、1546年のトリエント公会議でカトリック教会の公式ラテン語聖書と確認され、様々な改定を経て

今日に至る。

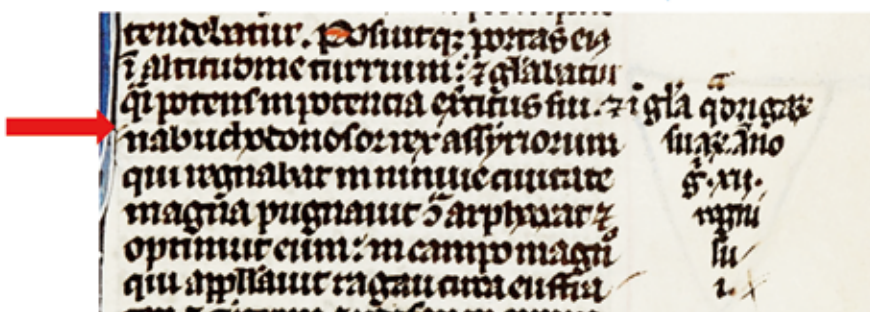
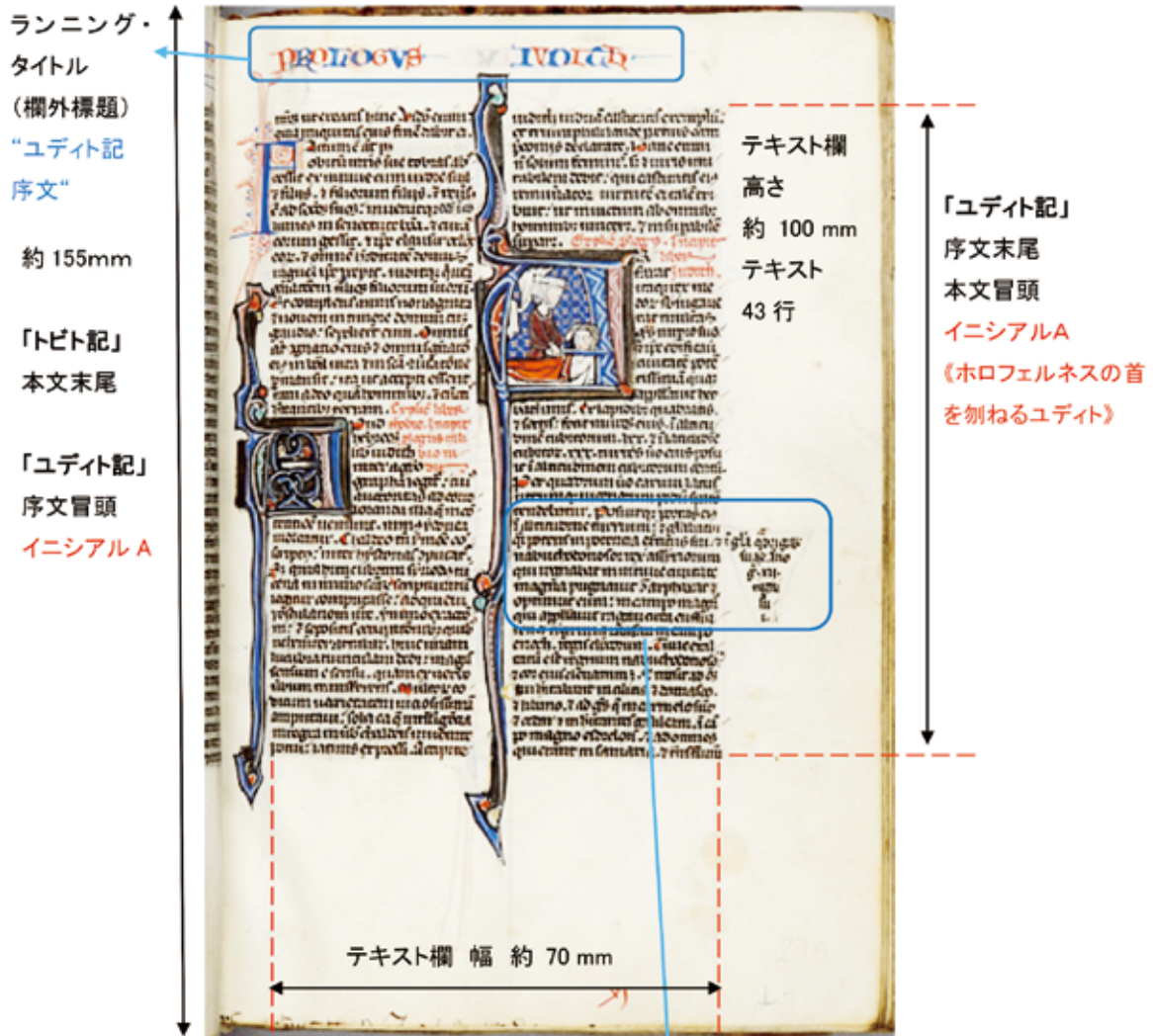
13世紀第2四半期のパリ大学において標準化されたウルガータ訳聖書は、現代の『新共同訳聖書』とは異なる以下の特徴を持つ。

① 序文：巻頭、モーセ五書（創世記～申命記）、ヨシユア記、列王伝、預言書、四福音書、使徒言行録、書簡、黙示録などの本文に先立ち、聖ヒエロニムス等による「序文」を伴う（図3）。

関西学院大学図書館所蔵『ラテン語ウルガタ聖書写本』 フォリオ 275r

フォリオ外寸 約 155 x 110 mm

約 110 mm



で示した箇所、1行分の本文を飛ばしてしまったため、不足分テキストを右の欄外余白の逆三角形の囲み内に追記している

図3 関西学院大学図書館所蔵『ラテン語ウルガタ聖書写本』 レイアウト例 (fol. 275r 「ユディ記」)

②ヘブライ語人名注釈：聖書本文中に登場するヘブライ語の固有名詞をアルファベット順に注釈した用語集を巻末に収録する（図4）。



図4 fol. 70lv 「ヘブライ語人名注釈」 Cの項目

③『新共同訳聖書』では「旧約聖書統編」（旧約聖書外典）に分類されるトビト記、ユデイト記（図3）、マカバイ記1・2などを収録する。これらのテキストは一卷本聖書写本では概ね歴史の時系列に沿って配置され、キリスト降誕に先立つヘレニズム時代のユダヤ民族の歴史を叙述するマカバイ記は、旧約聖書の末尾に置かれている。

④旧約・新約聖書を構成する一部のテキストの呼称や配列が異なる。『新共同訳聖書』のサムエル記上・下と列王記上・下は、ウルガータ訳聖書では列王伝（列王記）1・2・3・4と呼ばれる。また、使徒言行録は、『新共同訳聖書』では四福音書とパウロ書簡（ローマの信徒への手紙～ヘブライ人への手紙）の間に位置するのに対し、ウルガータ訳聖書では、通常、パウロ書簡と公同書簡（ヤコブの手紙～ユダの手紙）の間に置かれる。

黒インク一色で印刷される今日の印刷本聖書と異なり、中世の聖書写本は、収録するテキストの分節構造を、色インクや大型のイニシアル等により明示する。関西学院大学図書館所蔵『ラテン語ウルガータ聖書写本』の場合、旧約聖書の詩篇を除き、頁上辺の余白には、収録テキスト名を示す“EXODVS”（出エジプト記）、“PROLOGVS IVDITH”（ユデイト記序文）等の欄外標題が、赤・青インクで交互に記された大文字（キャピタル）で提示され、各書の序文や本文の開始・終了は、その都度、朱書き標題（仏：

rubrique）により告知される（例：fol.275r “*Explicit Liber Thobie. Incipit Prologus in Libro Iudith*”「トビト記の終わり・ユデイト記序文の始まり」）（図3）。『ラテン語ウルガータ聖書写本』では、加えて、序文はテキスト5-7行分の高さのアラベスク文様を織り込んだ彩飾イニシアルにより、本文はイニシアル枠内に物語場面等を描き込んださらに大型の物語イニシアル（historiated initial）により、開始する。本文の第2章以下の分節の冒頭は、赤・青インクによる線条装飾（仏：filigrane）を伴うテキスト2行分の高さの装飾イニシアルと、赤・青インクで記されたローマ数字による章番号により、示される。テキストには句点による分節や節番号の表示は無いが、テキストの主な区切りは文頭の文字に赤インクを差すことにより示される。巻末の「ヘブライ語人名注釈」では、“A”に始まるアルファベットの見出しに大型の彩飾イニシアルを配し、以下に続く個々の固有名詞の冒頭は赤・青インクで交互に記されたキャピタルにより示される。

3. 西洋中世の冊子体 (codex) 写本の物理的構成と本文筆写・装飾のプロセス

多くの場合、西洋中世の冊子体写本を構成する紙葉は、フォリオ (folio) すなわち「葉」を単位として数え、それぞれのフォリオで表 (レクト recto) と裏 (ヴェルソ verso) を区別する（例えば、フォリオ1のレクト、フォリオ4のヴェルソ；表記は fol.1r, fol.4v）。

西洋中世の冊子体写本は、単独のフォリオ (2頁分に相当) ではなく、ビフォリウム (bifolium) と呼ばれる一つながりの左右見開き2葉 (4頁分に相当) を単位として作られる。このビフォリウムを4、5あるいは6枚、時には12枚重ねた折丁 (おりちよう；gathering) を、何冊か綴じ合わせるにより、書物は作られた (4枚折丁=8葉、16頁；5枚折丁=10葉、20頁)。この「折丁」を単位とする冊子体書物の構成法は、今日の印刷本においても基本的な同じである。関西学院大学図書館所蔵『ラテン語ウルガータ聖書写本』は、12枚折丁、すなわち12ビフォリウム (=24葉、48頁) を単位として構成されている。

本文の筆写は、所定枚数のビフォリウムを折丁として束ねた後に、行われた。紙面を節約するためか、折丁を改める (先行する折丁の末尾に白紙頁を残し、後続折丁の冒頭頁から新しいテキストを始める) ことをせずにテキストを

書き継ぐことが多い一巻本聖書写本では、単独の写字生が、複数の折丁に亘って本文筆写を続けることになる。関西学院大学図書館所蔵『ラテン語ウルガタ聖書写本』の場合、テキストの区切りに合わせて改丁が行われているのは、新約聖書末尾のテキストである黙示録とヘブライ語人名注釈との間(第29・30折丁間)のみである。

収録テキストの筆写が完了すると、本文の校正、すなわち手本となった写本テキストとの校合が行われる。関西学院大学図書館所蔵『ラテン語ウルガタ聖書写本』では、複数個所で、手本のテキストの一部を飛ばして筆写した箇所を修正するため、テキスト欠落箇所に参照記号を入れ、書き忘れたテキストを付近の余白に追記している(図3)。

序文や本文の冒頭を彩る大型の彩飾イニシアルは、収録テキストの筆写完了後に、制作される。しかしながら、綴じ合わされた折丁に彩飾を施すことは難しい。そのため、多くの場合、冊子体写本の彩飾は、本文筆写が完了した折丁を再びビフォルウムに解体し、ビフォルウムの同一平面を単位として行われた。例えば、fol.1-8を含む4枚折丁では、fol.1とfol.8、fol.2とfol.7、fol.3とfol.6、fol.4とfol.5がそれぞれ一枚のビフォルウムを構成し、fol.1rとfol.8vが同一平面上に並ぶ。彩飾は、基本的に、同一平面上にある2頁分をまとめて行うのが効率的であり、本文筆写を行った写字生とは異なる専門の彩飾職人がその任に当たった。

彩飾が完了したビフォルウムは正しい順序で再び折丁へと綴じ合わされ、折丁は正しい順序で製本されなければならない。解体された折丁の復元を確実にを行うため、各折丁前半のフォルオのレクト面下辺には、当該葉の折丁内の順番を示すローマ数字やアルファベット記号(signature)が書き込まれた(図3)。これらの印は製本の最終段階で消去される場合も少なくないが、関西学院大学図書館所蔵『ラテン語ウルガタ聖書写本』では、写本の随所にこれらの印を確認することができる。折丁を正しい順序で製本する丁合のための印は「キャッチワード(catchword)」と呼ばれる。これは、各折丁最終葉のヴェルソ面下辺余白に、次の折丁第1葉レクト面の冒頭の数語を記したものである。

『ラテン語ウルガタ聖書写本』では、これらの丁合のための印の他に、テキストの終了・開始を告げる朱書き標題や頁上辺の欄外標題を指示するメモが、消去を免れて頁下辺余白に残されているのを随所に確認することができる(図3,7)。

4. 西欧中世の様々なラテン語聖書写本

関西学院大学図書館所蔵『ラテン語ウルガタ聖書写本』に見られるような小型の一巻本聖書は、大学の神学生やドミニコ会等の托鉢修道会会士の個人用聖書として普及した写本形式である。一巻本として携行可能なサイズを実現するため、フォルオの反対面の文字が透けて見えるほど極薄の獣皮紙に省略記号を駆使した極小の文字で筆写することにより本文分量を圧縮すると同時に、フォルオ面には頁を繰るのに十分な余白を確保している³。西欧中世では、この他にも、用途に応じて、様々な形式・内容構成の聖書写本が制作された。

聖書の序文・本文およびヘブライ語人名注釈のみを収録する学生用の小型一巻本聖書の対極にあるのが、神学者の注釈を本文の傍らに大量に書き込むために作られた教授用の注解付き聖書である。頁面中央付近に筆写されたわずか数行の聖書本文の行間や周囲に、これをはるかに凌駕する分量の注釈が本文の半分以下のサイズの文字で書き込まれた、特異なレイアウトの大型写本である(参考:図14)。旧約・新約聖書全編を揃えると、10巻前後の大部な編成となる⁴。

他方、旧約・新約聖書全編の序文・本文のみを比較的厚手の獣皮紙に大きな文字で筆写した朗読用聖書は、主に修道院での聖書音読に用いられた大型写本である。書見台(レクターン)に据え付けて用いるためレクターン・バイブルとも呼ばれ、総重量が20~30kgに及ぶ作例も知られる⁵。

5. 『ラテン語ウルガタ聖書写本』の挿絵・彩飾

これまで見てきたように、関西学院大学図書館所蔵『ラテン語ウルガタ聖書写本』は、神学生や托鉢修道会会士の個人用聖書として普及した小型一巻本聖書写本の基本的な特徴を備えている。これらの小型聖書の中には、関西学院大学図書館所蔵写本のように、旧約・新約聖書全編にわたり豪華な装飾イニシアルを伴う作例も、少なからず知られる。最も質素な部類に属する作例でも、テキストの分節を明示するためには、通常のテキスト数行分の高さを持つ(色インクによる)大型イニシアルが必要であった。

先に触れたように、写本に含まれる様々なタイプの装飾



図5 fol. 5r 「創世記」

は、実用的な機能も担っていた。頁上辺余白に赤・青インクで交互に記された大文字による欄外標題は、当該テキスト名に加え序文・本文の別も表示し、テキストを分節する装飾イニシアルは、そのサイズと装飾タイプにより序文・本文を区別し、下位分節である章の冒頭を明示する。本文冒頭のイニシアル枠内に描き込まれた挿絵は、小型ながらも、続く本文の内容を簡潔に喚起する標題のような役割を果たした。

関西学院大学図書館所蔵『ラテン語ウルガタ聖書写本』は、巻頭の聖書全体への序文 (fol.1r) に始まり、創世記 (fol.5r) 以下、ほぼ全ての収録テキストの本文冒頭と、詩篇の8箇所主要分節の冒頭に、物語場面や人物像の描写を伴う大型の物語イニシアル (historiated initial) 計78点を配す。これらの物語イニシアルに加え、モーセ五書 (創世記～申命記)、ヨシュア記、列王伝、預言書、四福音書、使徒言行録、書簡、黙示録などに付された序文の冒頭、ルツ記、ナホム書、ユダの手紙の本文冒頭、そして巻末のヘブライ語人名注釈のアルファベット見出し文字には、蔓草モチーフを意匠化したアラバスク文様を主体とする80点以上の彩飾イニシアルを置く。

何点かのイニシアルを取り上げながら、『ラテン語ウルガタ聖書写本』の彩飾を観察しよう。創世記本文冒頭のイニシアル “I” (fol.5r) は、本写本中、最も豪華な物語イニシアルである (図5)。頁面のほぼ中央を貫く長方形のイニシアル内部の、上下に連なる7個のメダイオン (内部に人物像や物語場面を描き込んだ円形や花卉形の枠) を枠取りに、「天地創造の七日間」を、創造主と最小限の被造物にモチーフを絞って展開する。イニシアルの下辺に接する頁下辺余白の長方形の区画には、聖母マリアと弟子のヨハネを伴う磔刑のキリストの左右に、白い僧服に黒っぽい頭巾付きマントを着用した頭光を戴く二人の修道僧を描く。キリストに向かって跪拝するこれら二人の聖人は、服装と写本の推定制作年代から、ドミニコ会士の聖ドミニクスとヴェローナの聖ペトロ (1253年に列聖) を表すと思われる。イニシアルの上下両端からは、テキスト欄の左右の幅一杯に、蔓草を意匠化したアンテナ装飾が伸び、頁の右辺余白には、蔓草の先端に食らいつくドラゴンがぶら下がる。後述するように、本写本中に頻出するこのドラゴンのモチーフは、『ラテン語ウルガタ聖書写本』の制作地を推定する有力な手がかりとなる。

出エジプト記本文冒頭のイニシャル“H”(fol.32r)(図2)には、イスラエルの民を率いて砂漠を旅するモーセとアロンを描く。画面右端に描かれた2本の柱状のモチーフは、砂漠で一行を導く火の柱と雲の柱であろう。高さ3cm足らずの枠内に、物語のエッセンスを極限まで絞り込み表現している。イニシャルからは、所々に節を伴う蔓草を意匠化したアンテナ装飾が、カラム全長に沿って伸びる。

エズラ記本文冒頭のイニシャル“I”(fol.249r)(図6)は、縦長のイニシャル内部を3段に区切り、エルサレムの神殿の再建を指揮する王(上)、建設現場(中)、建設を見守るエズラ(下)を、それぞれ描く。イニシャルの上下両端からはエメラルドグリーン色の葉を伴う巻き蔓が伸び、イニシャルの下方には巻き蔓に食らいつくドラゴンがぶら下がる。また、イニシャル枠の左側余白には、帽子を被った人物頭部をドラゴンの胴体に接続したグロテスク・モチーフの下部描き線を消した痕跡が見える。



図6 fol. 249r 「エズラ記」本文冒頭のイニシャル“I”

フォリオ 275r(図3)には、ユデイト記の序文ならびに本文冒頭のイニシャル“A”が、左右のカラムにそれぞれ配される。左カラムの序文冒頭のイニシャル内部には左右対称に意匠化されたアラバスク文様が描かれるのに対し、右カラムの本文冒頭のイニシャルには、ユデイトが敵将フォロフェルネスの寝首を掻く名高い場面が必要最小限のモチーフにより描写される。頁右辺余白には、写字生が筆写の際に書き漏らした本文の一節が、テキスト欠落箇所への参照記号とともに、追記されている。



図7 fol. 544v 「マタイによる福音書」

新約聖書のマタイ伝冒頭(fol.544v)(図7)には、左カラムに第2序文冒頭のイニシャル“M”、右カラムに本文冒頭のイニシャル“L”を配す。“Liber generationis Ihesu Xpi...”「イエス・キリストの系図…」で始まるマタイ伝冒頭句は、ダヴィデ王に遡るイエスの系図を、イニシャル“L”を枠取として、ダヴィデの父エッサイの腰から伸びる木の幹になぞらえて描く挿絵の典拠となった。ここでは、紙面の制約上、系図の頂点に座すイエスの“先祖”は、イエスの親世代のマリアと根元のエッサイそして息子のダヴィデの3人に限定されている。

これらの物語イニシャルの主題は、いずれも、13世紀

フランスの聖書写本の挿絵としては、定型とも言うべきものである。あらゆる要素を切り詰めコンパクトさを追求した一巻本聖書にあって、高さ3cm前後の小さな画面の中に封じ込められたこれらの挿絵は、同種の構図を何度となく描いたであろう写本画家にとっても、頁を繰る神学生にとっても、テキスト識別を助ける目印のような役割を果たしたことであろう。



図8 fol. 449v「エゼキエル書」本文冒頭のイニシャル“E”

『ラテン語ウルガタ聖書写本』の彩飾に用いられた絵具の色数は比較的限られているが、13世紀後半のフランスの写本彩飾に一般的であった赤（朱）・青・白色の他、パリ以北の地域では1260-70年代以降に用例が知られるようになるエメラルドグリーンも散見する。物語イニシャルの背景に、金地や無地の色地ではなく、白色の網目状モチーフを被せた色地をしばしば用いていることも、本作の制作年代を推定する一助となる（図3,5,7）。加えて注目したいのは、イニシャル本体の枠やイニシャルから上下の余白に伸びる蔓状のアンテナ装飾に用いられた、赤みを帯びた金

色を呈する画材である。これらの画材は、酸化のために黒変しフォリオ反対面に錆による滲みを生じていることから、銀泥もしくは錫をサフランでコーティングすることにより金泥に似た効果を狙った、金泥の代用品と考えられる（図8）⁶。

6. 『ラテン語ウルガタ聖書写本』の制作地・制作年代と来歴

関西学院大学図書館所蔵『ラテン語ウルガタ聖書写本』は、写本の版型と体裁、テキスト構成、赤・青のインク線描によるイニシャル線条装飾や濃彩による彩飾イニシャルのアラベスク文様の様式（図4）などの点において、13世紀第3四半期にパリで制作された小型一巻本聖書の特徴を共有する。「天地創造の七日間」を展開する創世記本文冒頭の物語イニシャル“T”の下端に接する区画にキリスト磔刑図を描く図像配置も、13世紀パリの一巻本聖書の挿絵における定型的な表現である（図5）⁷。

一方、彩飾イニシャルから伸びる蔓草に噛みつくドラゴンと、その背面・頭上から見下ろす角度で描かれた矢筈状に連なる背中の鱗のパターンは（図5,6）、本写本の彩飾画家とフランス北部のアラス、カンブレ、リールを中心に1260-70年代にかけて活躍した逸名の彩飾写本画家“Johannes Philomena”グループとの関連を強く示唆する。こうした特徴的な細部を伴うドラゴンに加え、頭巾を被った女性頭部や無帽の男性頭部にドラゴンの胴体を接続したグロテスク（図9-1,9-2）は、“Johannes Philomena”グループの基準作である1266年制作の『カンブレ大聖堂の典礼用福音書・書簡』⁸ 写本の余白装飾レパートリーの中核をなすモチーフである⁹。



図9-1 fol. 112v「ヨシュア記」



図9-2 fol. 504r「ハバクク書」

以上の考察から、『ラテン語ウルガタ聖書写本』の制作地・制作年代に関する現時点での発表者の見解をまとめておきたい。1. 小型の一卷本聖書写本としての体裁や、写本の随所に施されたイニシアルの線装飾とアラベスク文様の様式は、1260-70年代にパリで制作された作例と共通する特徴を示す。2. 一方、彩飾イニシアルに伴うドラゴンや余白装飾に類出するグロテスクのレパートリーは、アラス、カンブレー、リールを中心に1260-70年代にかけて活躍した逸名の彩飾写本画家“Johannes Philomena”グループとの関連を強く示唆する。3. 蔓草文様に散見するエメラルドグリーンの蔦の葉や物語イニシアルの背地に類出する白色の網目状モチーフもまた、本写本の1260-70年代の制作を傍証する要素である。以上の所見から、発表者は、先行研究も指摘するように、関西学院大学図書館所蔵『ラテン語ウルガタ聖書写本』は、1260-70年代に、フランス北部のカンブレーを中心とする地域で、同時代のパリで普及した小型一卷本聖書の体裁に倣って制作されたと考える。

現時点では、本写本の制作当初の注文主や使用環境について、具体的に知る手がかりは無い。しかしながら、創世記本文冒頭頁に描かれた磔刑のキリストを跪拝する2聖人がいずれもドミニコ会士であること(図5)、小型一卷本聖書が神学生や托鉢修道会会士の個人用聖書として普及したことを鑑みるならば、『ラテン語ウルガタ聖書写本』はドミニコ会修道士のために制作された可能性が高いと考えてよからう。

『ラテン語ウルガタ聖書写本』の15世紀以降の来歴は、先行研究によりかなりの程度まで明らかにされている¹⁰。写本冒頭部の遊び紙の一葉には、ケルンの聖クニベルト聖堂の司祭であったリエージュ生まれの神学者ヨハネス・デ・ベルカ(1425-1482)が、1451年に火災により被災したケルンのカルトゥジオ修道会の聖バルバラ修道院に、この写本を寄贈した経緯が記されている。また、現在この写本を保護する表・裏表紙の型押し模様入り革製装幀も(図1)、型押し模様のパターンから、15世紀のフランドルないしはドイツの制作と推定されている。先行研究が指摘するように、遅くとも15世紀には、この写本がフランス北部から南ネーデルラントないしはドイツに渡っていたと考えるのが妥当であろう。

7. 関西学院大学図書館所蔵の初期印刷本ラテン語聖書

関西学院大学図書館は、これまで観察してきた13世紀の『ラテン語ウルガタ聖書写本』に加え、15世紀後半にドイツで刊行された印刷本ラテン語聖書のオリジナルを複数所蔵している。これらの印刷本聖書は、巻頭頁に施された豪華な装飾や本文を分節するイニシアル、欄外標題や朱書き標題などを時に手書きで加えることにより、13世紀以来のウルガタ訳聖書写本の伝統的な形式を踏襲している。これら15世紀後半の初期印刷本聖書を観察し、写本から印刷本への移行期に刊行された聖書の特徴を改めて確認したい。

1455年頃ヨハン・グーテンベルクがマインツで刊行したグーテンベルク印行『42行聖書』(原葉2枚)(図10)は、レクターン・バイブルの版型を踏襲するフォリオ版の聖書である。同時代の大型聖書写本に典型的に見られるいかめしく角張った「ひげ文字」様の活字が特徴的である。ヨエル書の開始を告げる朱書き標題や本文を分節する赤・青色の大型イニシアルは、手彩色で施されている¹¹。



図10 グーテンベルク印行『42行聖書』, 1455?

1478年ニュルンベルクでアントン・コーベルガーが刊行した『コーベルガー印行ラテン語聖書』第3版もまた、レクターン・バイブルの版型を踏襲するフォリオ版の聖書である(図11,12)。巻頭の聖書全体への序文の冒頭に手彩色で描かれたイニシアル“F”は、白色の繊細な蔓草文様を被せた青色の背地に金泥による文字本体を配し、イニシアルの周囲を赤と緑で塗り分けた枠と同時代の彩飾写本の

余白装飾に倣う華麗なアカンサス葉により装飾されている。黒インクで印刷された欄外標題やローマ数字による章番号にも手彩色で朱色を差し、本文を分節する大型イニシアルは赤ないし青インクによる手彩色で加えられている。こうした特徴が写本の体裁を踏襲するのに対し、レクト面の右上隅にローマ数字で印字されたフォリオ番号は、テキスト文面のみならずレイアウトまで同一のコピーを複数制作することが可能な印刷本ならではの新しい工夫である¹²。



図11 コーベルガー印行ラテン語聖書、第3版、1478 (創世記1章)

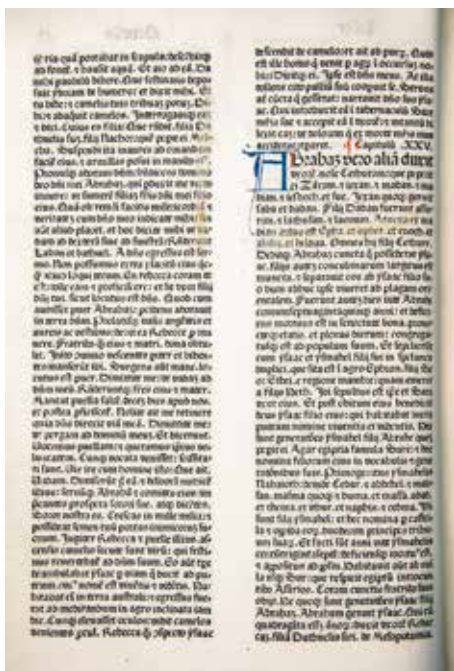


図12 コーベルガー印行ラテン語聖書、第3版、1478 (創世記25章)

1462年マインツでペーター・シェッファールとヨハン・フストが刊行したフスト・シェッファール印行『48行聖書』(原葉1枚)は、今回取り上げる印刷本聖書の中では、最も写本の外観に忠実な聖書である。本書もまた、レクターン・バイブルの版型を踏襲するフォリオ版の聖書である(図13)。創世記25-26章のローマ数字による章番号や赤・青インクによる線装飾を伴う章冒頭のイニシアル、頁上辺に赤・青インクで交互に記された大文字(キャピタル)による欄外標題など、いずれも写本の外観をかなり忠実に踏襲している。これに対して、本文印字に用いられた活字は、現代のいわゆる「ローマン体」を予告する丸みを帯びた洗練された外観を特徴とする。ゲーテンベルクのいかめしく角ばった「ひげ文字」様の活字に対し、これ以後に印刷本活字の主流としてさらなる発展を遂げることになる「ローマン体」の萌芽をここに見て取ることができる¹³。



図13 フスト・シェッファール印行『48行聖書』、1462 (創世記25-26章)

もう1点注目したいのが、『コーベルガー印行ラテン語注解付き聖書』（サン=シェールのユークによる注解付き）である（図14）。中世の注解付き聖書写本と同様、これもフォリオ版の聖書である。同じテキストでも写本毎に異なる複

雑な注解レイアウトを印刷により整理・固定したとも言うべき本書は、教授者が探究の進展に応じて余白に注解を書き加えるという写本独特の慣行が過去のものとなった表れであろうか¹⁴。



図14 コーベルガー印行ラテン語聖書（サン=シェールのユークによる注解付き），1498

8. おわりに

関西学院大学図書館所蔵『ラテン語ウルガタ聖書写本』は、13世紀後半に「爆発的に」普及した小型一巻本聖書写本の姿を今日に伝える貴重な資料である。発表者のこれまでの中世写本実地調査の経験を通じて得た個人的な印象を申し上げるならば、13世紀以降に流通した小型一巻本聖書の大部分は13世紀後半の作例であり、その後は、印刷本聖書に取って代わられるまで、13世紀後半に制作された「古本」が市場の需要を満たし続けていたと思われる。事実、13世紀後半の聖書写本に15世紀の所有者の書き込みが見つかる事例も少なくない。

15世紀後半に相次いで刊行されたラテン語聖書がいずれも据え置き型のフォリオ版聖書であったのは、一つには、印刷の黎明期には、小型一巻本聖書を印刷により「再現する」ことが技術的に困難であったことが考えられる。その一方で、15世紀後半には、かつての「小型一巻本聖書を個人が所有する」という聖書の「使い方」に大きな転機が訪れていたであろうことも、見逃せない要因である。

関西学院大学所蔵のさまざまな聖書からは、時代を経た書物だからこそ窺い知ることのできる、多様な文化的・歴史的背景が読み取られ、興味が尽きない。

基本参考文献

【関西学院大学図書館出版物】

宮谷 2002：宮谷宣史「貴重図書紹介 グーテンベルク42行聖書」、関西学院大学図書館報『時計台』no.71（2002），pp. 2-6。

田淵 2003：田淵結「書物としての聖書」、関西学院大学図書館報『時計台』no.73（2003），pp. 10-13。

雪嶋 2004：雪嶋宏一「関西学院大学図書館所蔵の15世紀刊行聖書について」、関西学院大学図書館報『時計台』no. 74（2004），pp. 17-19。

125周年記念 2014：『印刷技術と聖書～「読む」キリスト教への変容～』（関西学院創立125周年記念 大学図書館特別展示会 図録），2014。

特別展示 2018：「特別展示 ラテン語聖書写本と貴重聖書コレクション」（2018年11月21日～11月30日関西学院大学図書館特別展示資料）。

【関西学院大学図書館サイト 関西学院と聖書】

『ラテン語ウルガタ聖書写本』

<https://library2.kwansei.ac.jp/e-lib/seisho/ratenurugata/021/index.html>

『グーテンベルク42行聖書』（グーテンベルク印行『42行聖書』）

<https://library2.kwansei.ac.jp/e-lib/seisho/gutenberg/001/index.html>

『コーベルガー版ラテン語聖書』（コーベルガー印行ラテン語聖書, 第3版）

<https://library2.kwansei.ac.jp/e-lib/seisho/koberger/002/index.html>

【その他の参考資料・文献】

(Peter KIDD) : (Peter KIDD), Bible with the Prologues attributed to St. Jerome and the interpretations of Hebrew names in Latin. Northern France, Second half of 13th century. Ex-library copy from Thomas Phillipps collection : サー・トーマス・フィリップス旧蔵品 13世紀後半 北フランス制作『ラテン語ウルガタ聖書写本』（ヒエロニムスによる序文とヘブライ語人名注釈を含む）（収蔵時の添付資料）共同訳聖書実行委員会『聖書 新共同訳-旧約聖書続編つき』日本聖書協会、1987.

関根正雄 編『旧約聖書外典（上・下）』講談社文芸文庫、1998-1999.

加藤哲平『ヒエロニムスの聖書翻訳』教文館、2018.

BEER 1969 : Ellen BEER, Das Scriptorium des Johannes Philomena und seine Illuminatoren : Zur Buchmalerei in der Region Arras-Cambrai, 1250 bis 1274, in *Scriptorium*, 23 (1969), pp. 24-38.

BRANNER 1977 : Robert BRANNER, *Manuscript Painting in Paris during the reign of Saint Louis*, Berkeley, 1977.

ド・ハメル 2004 : クリストファー・ド・ハメル 著、朝倉文市 監訳『聖書の歴史図鑑』東洋書林、2004 (Christopher DE HAMEL, *The Book. A History of The Bible*, London / New York, 2001),

『ヴァチカン教皇庁図書館展 書物の誕生：写本から印刷へ』（東京、印刷博物館）、2002.

STONES 2013-2014 : Alison STONES, *Gothic Manuscripts*, 4 vols, London, 2013-2014.

安形 2018 : 安形麻里 監修『インキュナブラの時代—慶應義塾の西洋初期印刷本コレクションとその広がり—』（第30回慶應義塾図書館貴重書展示会 図録）、慶應義塾図書館、2018.

脚注

¹ 関西学院大学図書館所蔵『ラテン語ウルガタ聖書写本』については、(Peter KIDD) ならびに同館公式サイト内「関西学院と聖書」<https://library2.kwansei.ac.jp/e-lib/seisho/ratenurugata/021/index.html> を参照。

² 中世のラテン語ウルガタ訳聖書写本については、ド・ハメ

ル 2004、第1章を参照。

³ ド・ハメル 2004、第5章を参照。

⁴ ド・ハメル 2004、第4章を参照。

⁵ ド・ハメル 2004、第3章を参照。

⁶ 金泥の代用画材については、以下の文献を参照 : Rutherford J. GETTENS, George L. STOUT, ed., *Painting Materials. A Short Encyclopaedia*, New York, 1942, pp. 154-155, 160 ; Daniel V. THOMPSON, *The Materials and Techniques of Medieval Painting*, New York, 1956, pp. 181-186.

⁷ 13世紀パリのラテン語聖書写本の彩飾については、BRANNER 1977 ; STONES 2013-2014, Part 1, vols 1, 2, Part 2, vol. 2 を参照。

⁸ カンプレー市立図書館 189-190 番写本。 https://bvmm.irht.cnrs.fr/resultRecherche/resultRecherche.php?COMPOSITION_ID=4774 ; https://bvmm.irht.cnrs.fr/resultRecherche/resultRecherche.php?COMPOSITION_ID=4775

⁹ 『ラテン語ウルガタ聖書写本』の彩飾と“Johannes Philomena”グループとの関連については、(Peter KIDD) を参照。 Johannes Philomena については、BEER 1969 ; STONES 2013-2014, Part 1, vol. 2, Part 2, vol. 2 を参照。

¹⁰ Cf. (Peter KIDD)

¹¹ 宮谷 2002 ; 田淵 2003, p. 12-13 ; 雪嶋 2004, pp. 17-18 ; 125周年記念 2014, no. 1 ; 特別展示 2018 を参照。

¹² 田淵 2003, p. 13 ; 雪嶋 2004, pp. 18-19 ; 特別展示 2018 を参照。

¹³ 特別展示 2018 を参照。 シェッフアーとローマン体活字の展開については、安形 2018, pp. 62, 66-67 を参照。

¹⁴ 125周年記念 2014, no. 6 ; 特別展示 2018 を参照。

駒田 亜紀子 (こまだ あきこ)

実践女子大学文学部美学美術史学科教授 (西洋美術史)。

研究テーマ : 西欧中世後期 (13-15 世紀) の彩飾写本。

名古屋大学大学院文学研究科美術史学専攻およびパリ第4大学大学院美術史・考古学講座の博士後期課程修了。高知大学教育学部美術専修准教授を経て、現職。現在、国立西洋美術館客員研究員として、2019-20年に開催予定の西欧中世後期彩飾写本コレクション展の準備ならびに目録作成に従事。

主な著書 (共著) : *The Splendor of the Word. Medieval and Renaissance Illuminated Manuscripts at the New York Public Library*, New York, 2005 ; 翻訳 (共訳) : フランソワ・アブリル、マリー＝テレーズ・グセ 解説、月村辰雄、久保田勝一 監修『全訳マルコ・ポーロ 東方見聞録「驚異の書」fr. 2810 写本』岩波書店、2002年